

版画物語

山田の昔ものかたり（そのこ

しら

たさき

ひめ

白泡姫

文

中山梨恵子

監修

土井敏夫

版画制作

四五六年児童

むかし、むかし、山田のさとの鎌倉に

とてもりこうで、たくましい男が住んでおりました。
しかも、大へんな親思いで、はたらき者であったの
で近所でもひょうばんでした。



6年 豊島 大二郎

頭がよくて、はたらき者の男は、村の寺のおぼうさんのですで、京の都にのぼることにしました。

風のたよりで、京の都には大ぜいの人が住み

はなやかなくらしをしていると、聞いていました。

男は、きたいにむねをふくらませ

山田のさと、鎌倉かまくらをあとに、長い長い旅に出ました。



ようやく京の都にたどり着いた男は

大きなお屋しきではたらくことになりました。

もともと大へんなはたらき者の男は

毎日、毎日、いつしょうけんめいはたらきました。

庭そうじやまきわり、そして、水くみ、ふろたきと
朝からばんまで、くるくると、それはそれは

目が回るほどはたらきました。



4年 斉藤 加奈

その様子を見ていたお屋しきのご主人は大そうよ

ろこび

『山田男よ。山田男よ。』

と、わが子のようにかわいがりました。

お屋しきには、一人のむすめがおりました。

姉を雪姫ゆきひめといい、妹を白滝姫しらたきひめといいました。

どの姫もそれはそれは美しく

ご主人の自まんのむすめたちでした。

姫たちは、美しくきらびやかな着物を着て

何不自由なく、くらしておりました。



6年 宮本三寛

姉の雪姫は少しづがままで、何でも自分の

思い通りにならないと気がすまないほうでした。

しかし、妹の白滝姫は、姉とちがつて

だれにでもやさしく、とても素直なむすめでした。



ある日のことです。山田男が庭のそうじをしていると、えんがわで二人のむすめが習字を始めました。

姉の雪姫は、習字がにがてで、何度も書いてもうまく書けません。いろいろした姉の雪姫は

『これ、そこの山田男よ。ガサガサとうるさくてなりません。山田男のおかげで気がちり、字が書けないから

さっさとあっちへお行き。気のきかないなが者だ

こと。』

と、山田男を追はらいました。



4年 前田直美

それを見ていた妹の白滝姫は、山田男がかわいそうで仕方なく、頭を下げる、だまつて去つて行く山田男のせなかをじつと見つめていました。習字の練習が終わると妹の白滝姫は、すぐに山田男をさがしました。

いつもよくはたらいている山田男に、心をうたれていた白滝姫は、姉のしつれいをどうしてもあやまりたかったのです。



6年 谷井祐子

小屋のすみで、まきわりをしていた山田男を見つけると白滝姫は、姉のしつれいを心からわびました。

すると、山田男は

『いや、お姫さまの氣をちらすようなことをした

私が悪いのです。』

と、まったく気にしていないように言いました。

白滝姫は、山田男のやさしさと、さわやかさに心をうたれ、すっかり山田男がすきになりました。

山田男も、やさしく、心の美しい白滝姫に

知らず知らず、心を引かれていきました。



そんなんある日のことです。おふろのじゅんびがで
きたので白滝姫をよびに行きました。

ところが、そのおふろの湯かげんが少しあつ
く

白滝姫が

『お水を持って来てください。』

と、山田男にいいました。山田男はさっそくと水を
手おけにくんで、湯どのに上げようとしました。

すると、どうしたはずみか、手おけの水が白滝姫の
着物にかかってしまったのです。日ごろから山田男
に思いをよせていた白滝姫は、とっさに、山田男に
向かって歌をおよみになりました。



その歌をきいた山田男は、すぐに白滝姫へ思いをこめて歌をかえしました。たまたまそばを通りかかる白滝姫の父親であるご主人は、

山田男にこんなすぐれたさいのうがあることに、とてもおどろかれるとともに

白滝姫と山田男が、おたがいに強く引かれあっていふことに心を動かされました。



そこで、ご主人は、姫に山田男といっしょになり山田のさとにいくよにとおっしゃいました。

白滝姫と山田男は、天にものぼるようなきもちになりました。

ゆるしをえた二人は、京の都から山田男のふるさと

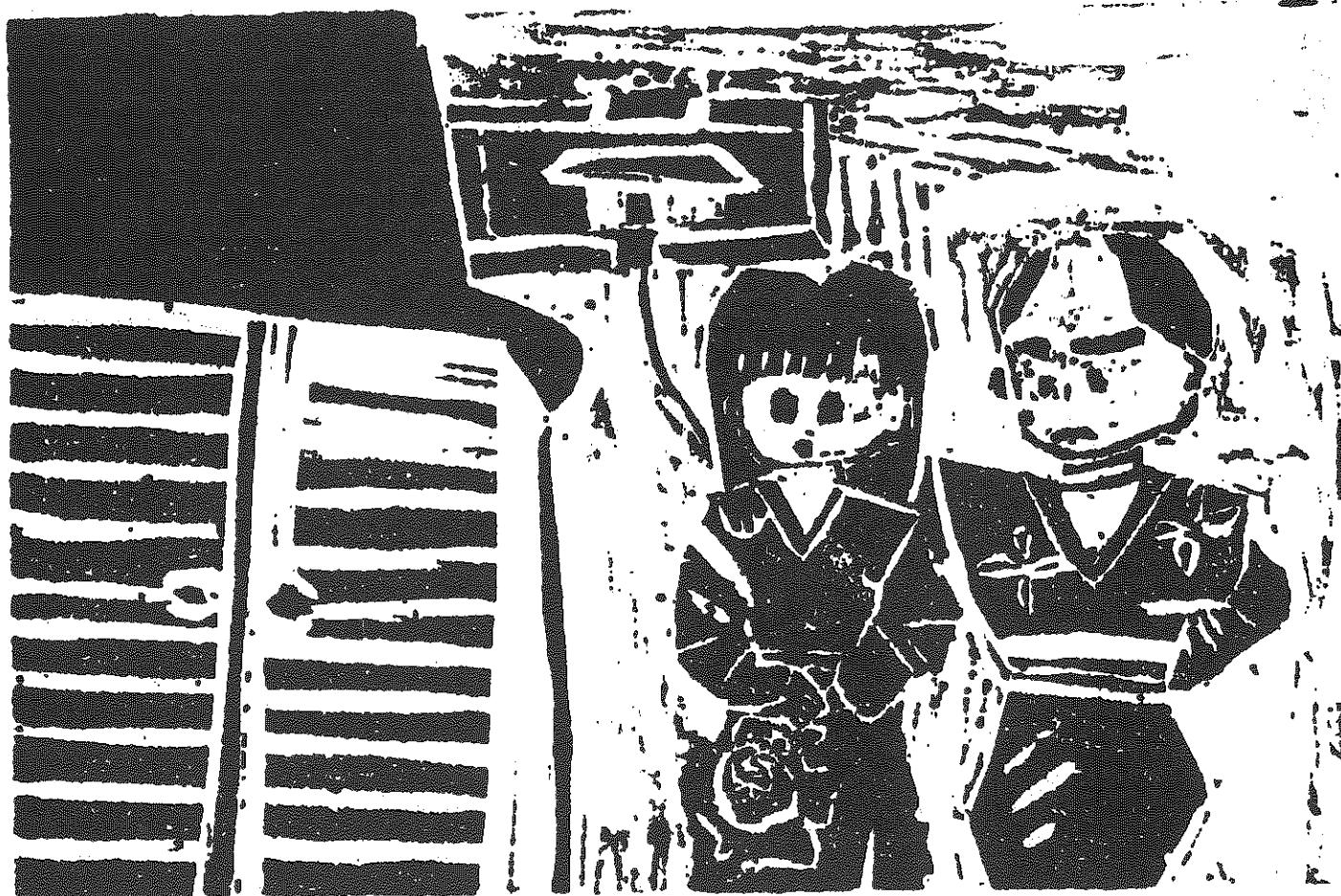
山田の鎌倉へうつり住むことになりました。



5年 谷井 真惟子

白滝姫の母親は、むすめに、よめいり道具として
黄金づくりの合わせ鏡を与える。末長く幸せにと
いのるよう二人を見送られました。

山田男と白滝姫は、手に手をとつて、長い長い道の
りを歩き、山田の鎌倉の土地に帰ってきました。



4年 古川雄一

ふるさと鎌倉では、あつという間に

あのはたらき者で、親こうこうむすこが京の都のお姫様をおよめにして帰ったと話が広まり

それはそれは大へんなさわぎになりました。

そして、そのようなりっぱな方といっしょに住むのはおそれ多いと、川向かいの『鏡が窪』に新しい家をつくり二人を住まわせました。

その後、二人は、いつまでもなかむつまじく、しあわせにくらしたということです。

※母親のかたみの形見の黄金づくりの合わせ鏡の一つは鎌倉八幡宮に、もう一つは、外輪野神明社に外輪野用水の守り神としてともにご神体としてまつられています。



山田の昔ものがたり（その一）

「白滝姫」

平成五年五月一日 発行

監修 土井 敏夫

文章指導 中山梨恵子 齋藤 久代

高堂 昭則 濑川 宣子

澤井 武志 沼崎 信行

高地 修 林 祥子

今井 博 坂下 豊一

山下 謙治 小川 義勝

岡本 伸一 境野 雅恵

若林 美雪 山岸 幸子

発行所

山田村立山田小学校

富山県婦負郡山田村中瀬一〇六
電話（〇七六四）五七一二三五四